

「自分で復讐してはいけません」

ローマ12：15－21

堀田修一 24・7・28

I キリストに愛され、キリストの愛にとどまる実

1. 「喜んでいる者たちとともに喜び、泣いている者たちとともに泣きなさい」：15。私たちは、まず神が、私たちの存在そのものを喜び、「わたしの目にあなたは高価で尊い、わたしはあなたを愛している」（イザヤ43：4）の愛を十分噛みしめ、神に愛されている喜びを確信している時にこそ、喜んでいる人々とともに心から喜ぶことができます。自分が辛い中にある時に、その自分を神が真実に愛されている事実を喜んでいない時には、喜んでいる人と共に喜ぶことは難しい。ねたみが生まれる。正直に祈りましょう。「私が良い状態でない時にも、あなたの大きな愛を受けて、喜んでいる人と共に心から喜び、神の恵みを共に感謝できますように」と。これは人の愛では不可能ですが、神には不可能はない。「泣いている者たちと共に泣く」ことも深い謙遜な神の愛が必要。相手の悲しみに寄り添い深く理解しなければ、ともに泣くことはできない。私たちは、神様ではないので、100パーセント、相手の悲しみを理解することはできない。すべて理解できているわけではないと自覚して、黙して悲しみに寄り添う、そばにいることは、共に泣くこと。地震、災害、戦争で愛する人をなくした人々の悲しみをニュースで見るときに、「もし自分が、その人の立場なら、どんなに苦しく悲しいだろうと想像し、黙し、悲しみ、痛み、その方々に主の慰めと支えと救いがあるように祈ること」は、ともに泣くことに含まれる。

2. 「互いに一つ心になり、思い上がることなく、むしろ身分の低い人たちと交わりなさい。自分を知恵のある者と考えてはいけません」：16。「一つ心になり」とは、キリストにあって一体とされた者として、民族、地位、男女や職業、経済的な格差の差別を越えて、一つ心になりなさいということです。ある支配者により、画一的に同じ考えを持つ、統制されるという意味では決してない。私たちを含む罪人は、神の座に自分を押し上げ、神に生かされていることを忘れ、自分の力で生きていると思いきり上がり、身分の低い人々を見下げ、交わろう、寄り添い助けようとはしない。ところが、罪人の私たちが、主を信じ主と一つとされ主が私たちの心に住まれるときに、私たちの心は変えられる。思い上がりの心が謙遜に変えられ、神に生かされ、すべては神の恵みと感謝する者とされる。そして、キリストが地上におられるときに、身分の高い人に、こびへつらうことなく、むしろ身分の低い人たちの存在を尊び、寄り添い愛をもって交わり、助けを与えられたように、主を信じる私たちの心に主が内住しておられるので、私たちも、思い上がらず、謙遜にされ、人を差別せず、身分の低い人たち、弱い立場の人たちの存在を大切にし、愛をもって交わり、お助けする者に変えられ続けます。自分を知恵（判断力）のある者と考え高ぶらず、謙遜に主とみことばに耳を傾け、信頼できる人に相談し、物事の判断、識別（人の分、主に頼り自分で行う自分の分、主の愛と力をいただいて協力し合う分、神の分）を祈り求め歩みましょ。う。

Ⅱ 悪に悪を返さず、自分で復讐してはいけない。神の怒りに委ねる。

1. 「誰に対しても悪に悪を返さず、すべての人が良いと思うことを行うように心がけなさい」：
17

人間（私も）は、悪には悪をもって報復しやすい存在です。主イエスは、地上の生涯の中で、悪を行う人に、その場で報復する偉大な力を持っておられたが、報復せず、恵みと真をもって言葉で忠告された。私たちも悪を行う人を「柔和な心で正す」（ガラテヤ6：1）ことは相手の益になり神に喜ばれる事です。主は生涯の最後に、報復せず、悪、罪を行うすべての人々（私たちを含む）を愛し、十字架の刑を身代わりにご自分が受けられたのです。報復の連鎖を断ち切る和解の福音。「すべての人が良いと思うことを行うように心がけなさい」とは＝すべての人が良いと思うことが正しいとは限らない。このみことばを直訳すると「すべての人の前で善を配慮しなさい」です。つまり、すべての人の前で真に善は何かを祈りつつ識別し、配慮して行うことです。私たちは、いつも、すべての人が良いと思うことが真の善とは限らない現実を認め、神の前に何が真の善かを祈り尋ねたい。すべての人に何が益となるかを祈り求め行動したい。

2. 「愛する者たち、自分で復讐してはいけません。神の怒りにゆだねなさい。こう書かれているからです。『復讐はわたしのもの。わたしが報復する。』主はそう言われます」：19。真の平和を保つためには、正しいさばきを神の時にされる神に信頼し委ね、自分の感情的な激怒によって復讐しないことが大切。行動する前に、神の前に祈り静まり自分を落ち着かせることが必要です。神は、神に敵対する罪人の人間（私たちを含む）に対して復讐せず、罪への正しい報いを身代わりに主が受けられ、十字架で「彼ら（全人類）をお赦しください」と祈られた恵みをいつも覚え感謝したい。自分の罪深さと神の赦し愛を本当に理解し感謝している人のみが、自分で復讐せず神に委ねることが出来ます。自分の怒りの勢いで人に復讐せず「神の怒りにゆだねなさい」の原語は、神の「怒りに場所を与えなさい」です。神の怒りは、人間の怒りと違い、罪、悪に対する冷静で間違いのないさばきのことです。私たちも裁判官も、神ではないので、罪、悪への間違った裁きをします。しかし、罪、悪への神のさばきは全く完璧に正しいものです。ですから十字架上の主は、「苦しめられても、脅すことをせず、正しくさばかれる方（御父）にお任せになった」（1ペテロ2：23）のです。黙示録20：12に「死んだ者たちは…自分の行いに応じてさばかれた」とあります。地上では、人間の悪は、正しくさばかれないことが多い。しかし、世の終わりの主の再臨後、完全に正しい神の最後の審判により、人は皆、例外なく正しくさばかれます。「復讐はわたしのもの。わたしが報復（正しいさばきを）する。」主はそう言われます（約束されている）。罪人である人間の身代わりに十字架で神の裁きを受けられた主を信じている人には、この永遠の裁き、滅びが過ぎ越され、永遠の新天新地に入れられるのです（黙示録21章）。

3. 「次のようにも書かれています。『もしあなたの敵が飢えているなら食べさせ、渴いているなら飲ませよ。なぜなら、こうしてあなたは彼の頭上に燃える炭火を積むことになるからだ』：20。敵対者に対して積極的に善を行うことは人間の愛では不可能。しかし、神に敵対していた神が、私たちを愛して救いという最高の善を下された奇跡的な驚くべき恵み、愛を本当に、いつも心から感謝しているなら、内住のご聖霊は、この不可能な愛を実行させて下さる。敵の「頭上に炭火を積む」とは、相手への攻撃ではなく、救いに導く激しい魂の痛みを与える事。憎しみに対して、神の愛をもって接するなら、相手に大きなショックを与え、真実な悔い改めに導

く。証し：パウロの体験。

4. 「悪（仕返しをする復讐、人と自分の心を傷つける憎しみ）に負けてはいけません。むしろ、善（滅んで当然の私たちを愛された神の愛）をもって悪（憎しみ、恨み、復讐）に打ち勝ちなさい」：21。

Ⅲ 「自分に関することについては、できる限り、すべての人と平和を保ちなさい」：18。「自分に関することについては」を直訳すると「もしできるなら、あなたの側では」。私たちは、すべての人と平和を保てるように祈ります。しかし、自分にも、すべての人にも罪の性質があるので、いつも平和を保てるわけではない。「できる限り」とは、平和が壊れた時に、自分の側では、相手に、お詫びすべきであれば赦しを願い和解の手を伸べる。しかし、和解、平和が成立するためには、相手の分、相手が心から赦してくれるかの領域がある。そこは、私たちはコントロールできない。そこは神に委ねて良いのです。そこで自分を責めるのは間違っている。真の和解には時間が必要。心で相手を赦しながら和解の実現のために祈る。